

大水体験記(当田町)

昭和二十八年九月二十五日、台風十三号による大雨で日野川の堤防が大番丁(白鬼女橋の上手)で切れました。

本文は、当時、武生市東用学校に勤めておられた栗田捨寿先生が体験された話です。

お昼すぎから次第に雨がきつくなってきた、日野川の堤防の低い所は水が溢れそうになっていました。

武生の東小学校からの帰り道、大番丁まできて驚きました、激流(激しい川の流れ)が堤防に当たってくずれだしているのです。

大勢の消防団の人たちが、そのくずれだした堤防が切れないように、むしろ(藁で編んだ敷物)

やシートを当てる杭を打ち、その上に土のう(土を入れた俵)を積み重ねて溢れる水をせき止めていました。

また、縄に大きな木の枝をつけて激流に流し、水がじかに堤防をけずらないように補強作業(くずれかけた所を強くする仕事)をしている人もいました。

わたしは、もし、ここが切れたら、川下の下司や鳥井や当田はひとたまりもない。大変だなと心配しながら急いで帰りました。

家の者は何も知らないで夕餉(ばんごはん)の支度をしていました。そこへわたしが飛び込んで今見たきたことを話すと、みんなはびっくりして大水のための用意を始めました。

まず、にわ(玄関の中の土間)一ぱいに広げてある糊(皮のついている米)を集めて、高い蔵へ運びました。

それがすむと、臼を並べて、その上にはしじを

渡して高い場所を作り、供出（割り当てによって、決められた値段で国へ売る米）する米俵を乗せました。

米を安全な所へ移し、ほっとしているところへ区長さんから、

「みんな、はよお宮さんへきなりんせの。」
と言っ知らせがありました。でもその時分にはもうお宮の前の橋は浮き上がっていて渡れませんでした。

外はますます激しい雨が降り続いていきます。

夜 八時ごろ、堤防が切れたという知らせの太鼓が鳴るとほとんど同時に鉄砲水（急激な増水で岩、土砂をふくんではげしく流れる水）が家中へ入ってきました。

縁側で飼っていたちやば（にわとりの一種）がさわぎだしましたが、かまっていられません。

いろいろ（家の中の床を四角に切った火を炊く場所）に水がたまりだし、みるみるうちに居間（ふ

だん家族のいる部屋）の上にも上がってきて、十五（六センチメートルにもなったでしょうか。敷いてあったござをめくるひまさえありません。大変な速さです。子どもは泣き出し、てんやわんやの大きわざです。

どうやら座敷だけで床下すれすれで助かりました。

つかれ切った体で蔵の二階へ逃げました。そして、ろっそくの明かりでささやかに晩御飯をすました。

今のようにテレビはないし、台風がどう動いているのかもわかりません。全く不安な気持ちですから、とても寝るどころではありません。本当に恐ろしい夜でした。

ようやく朝になりました。

雨も小降りになって、水も引いてきましたが、家のまわりには、流れてきたはさば（刈った稲を干すところ）の稲や、はさ木（はさばを組み立て

る木や竹)、藁束など何でもぶかぶか浮いていませ。大根畑は全滅です。

家の中も手のつけようがありません。かわいそうにちやばは三羽とも死んでしまいました。

私も勤めていた学校を休み、子どもたちと後片付けに精出しました。

いろいろやにわに、たまっている水をスコップで何回もすくって外へ投げました。

また、泥水につかった床や、柱、建具など何回もきれいに拭きとりました。そして床下に、消毒と乾そうをかねて石灰をまきました。

子どもたちは、ちやばのお墓を作ってやりました。

しかし、じめじめした家の中は、いやなおいがいつまでも消えなかつたし、床板には白く泥が浮いて何日も座ることができませんでした。そのうえ大事な井戸水は汚れてしまったし、いろいろは火が炊けません。

こんな苦しいときに、村からの炊き出し(災害にあつた人におにぎりを作つて配る)と、ララ物資(アジア救済連名からの贈り物)のカナダのかん詰をいただきました。本当にありがたいことで忘れることができません。

わたしたちの町に このような災難がそうたびたびあつたわけではないでしょう。けれども、ちよつとした雨が降ると川の水が道の上にかかるくらいにことはめずらしいことではなかつたのです。しかし、この頃では、すっかりなくなつてしまいました。全くうそみたいですが、住みよい所になりました。

附記

昔の豊地区は、半日大雨が降ると川の水が溢れ田畑が湖のようになりました。そこで、昭和四十四年から四十六年にかけて、細い川を何本も集めて大きい川にしたり、曲がりくねつた川をまっすぐにしたり、川底を深くしたりしました。